


R-18
ADULT ONLY!

VANQUISHED PUZZLES & DRAGONS

はじめに

■
始めての人も継続購入いただいている方々も、ご購入ありがとうございます。曼木銅音です。

■
今回はバズドラ本です。
最初は漫画を描こうと思ったのですがバズドラでヴァンキッシュドクィーンズ(クィーンズブレイドのムック本美闘士完全敗北をテーマにホビージャパンから2冊シリーズが発売中)自分も自キャラミムで参加しております。宣伝したので許してください(笑)
的なイラスト描けばいいじゃない!という一言で、折角ならある程度模した方が面白からうということでごうり形になりましたさすがに本文レイアウト等まで完全模倣する余裕はありませんでしたが、比較的イメージは似たものになっているかと、持っている方は比べてみてください。

■
仕様上SSを描かなければいけなかったのですが自分に文才が無くて泣ける。書いてる最中はなんでこんな仕様にしたんだと自分を殴ってやりたかったです。しっかり推敲する余裕もないので、至らぬところのうもろもろ散見しますが同人ということで楽しんでいただければ幸いです

■
ではでは、本文の方どうぞ～

2013 8/11
サークル たたらば
代表 曼木銅音

発行サークル たたらば
執筆者 曼木銅音
連絡先 m-yoshiike@oa.jful.jp
<http://tataraba.blog35.fc2.com/>

印刷 サングループ印刷
発効日 2013 8/11



戦女神

セイレント ミニネルヴァ

opponent

ヤマタノオロチ

蛇神

「やあ……たあああ……」

閃

私が剣を振るうと首がまたひとつ飛ぶ。もうこの上程を何度繰り返したであろうか。たしかヤマタノオロチといったかヒュドラに似た多頭蛇の化け物だ。戦いは終始私の有利に進んでいたがこの化け物は遠慮しい再生能力を持っていて、いくら倒すけてもすぐさま回復するせうか首を落とすとしてもすぐ新しい首が生えてきてしまう。

「このままではシリ貧だ！」
戦い続けてこちらも少なからず傷を負っているし、何より疲労が限界だ。こうなったら奴が回復する暇もないくらいに連続攻撃で気にしとめるしかない。最後の力を振り絞り、クインクボムを発動させようとした時それはおこった。突如奴の体から吹き出るオーラが増す。

「動けない！なんでもか！」
奴の体から強烈なフレッシュヤリに体がしびれたように動かない。威圧それが奴の持つてるスキルだった。

「いや……やめて、来ないで……」
動けなくなった私に奴はちろちろと舌を出しながらその薄気味の悪い体で絡みついて来た。

強く締め上げられ鎖が軋みをあげる。戦いで傷ついた鎖が、この締め付けに耐えられるわけも無く、無残に砕け散った。無防備に晒された裸身が市に揺れる。

鎖は砕け散れ白肌を晒すことになっていたが、それを気にする余裕はもう私には無かった。

「ああ……」
ザリザリザリ

うねった拍子にその毛羽立った鎖が私の陰核をすりあげ思わず声が出てしまう。どうやら体が異常に敏感になっているようだ。

その声に反応したのかしらないが奴はその複数の舌で乳首陰核はもとより後ろの穴まで刺激してきた。

あれからどれくらい経ったのだろうか。体の穴という穴から体液を垂れ流し、弛緩してほっかりと開いた全身の穴はいつでも受け入れ準備が出来ている状態だ。

何の目的でこんなことをしているかわからない。ひまど子ると本能で体を休める洞を作っているだけなのかもしれない。けどそんなことはもうどうでも良い。

全身を刺激されて快楽の……とか考えられなくなった私はその穴を埋めてくれるものを欲した。

「わたしの……おもしろい自由におつかいください……」
私はゆくりと股を開きうねるの回らない舌でこの新たな……主人様にただただ懇願するのだった。





永遠の神の巫女

目の前で赤い暴力が吹き荒れていた。

私はアマテラスオオカミ、神の巫女である。「いくら神の力を持っているとはいえ、圧倒的な暴力には無力じゃの！」巨人族のタイタンに「つかまれ私は死を覚悟した」

結果として私は死ななかった。

タイタンの欲望を満足させるためにおもちゃにされたのである。タイタンは巨人族だけあって体が大きい。今も私を片手で掴んで余りあるその物！私の体が小ぶりとかそんなこと関係ない。私の胸より太い剛直が無理やり私の中に侵入しようとする。ぶちぶちっ……

何度貫かれても慣れない感覚。また処女膜とともに体が引き裂かれる「びぎっ……びぎっ……」

私はその痛みに叫び声をあげる。

そもそもがサイズが合っていないのだ。快楽など訪れようはずもない体の奥まで貫かれ子宮が押しつぶされる。

おなかは不自然に膨らみまるでかえるのようだ。

「破れる！もう助弁して！もれ！お股が壊れてしまつたのじゃ！」
タイタンはお構い無しに私を体ごと前後に揺る。奴に「して私など所詮快楽を得るためのおもちゃでしかないのだ」

「くおおおお……」叫び声とともに奴は果てた。

その剛直から白く粘つく精液がまるで洪水のよつに私の奥を叩く「ああああああああああ」

物を引き抜かれた股間はほっかりと天穴を開けそこから大量の精液と血が混じった物がまるで洪水のよつにあふれている。

スタボロ口になった私を奴は壊れたおもちゃのように投げ捨てた。

今度こそ終わる！やっとな開放されると思った時にまた私の能力が起動した「神の奇跡」

引き裂かれた股間と「そろか処女膜も再生する。まるで時が巻き戻されたかのように元通りの童女のよつな綺麗な股間に逆戻りだ」

私は「の力のため壊れる」とすら許されないのだ。

「いやーもう壊して！」
普通なら喜ぶべきの強烈な治療の力が「この場合は拷問でしかない。奴の剛直がむくむくと起立するそれを見た私の心は終わり無き地獄を創造し絶望に染まった」

奴はこの新品の股間を引き裂く感覚が大好きなのだ。

あれから何度も引き裂かれても私は能力を失わなかった。これだけ汚されてもまたその神の寵愛を失わないらしい。私はアマテラスオオカミ、永遠の神の巫女である。しかし神は私の願いを聞くことはない。

アマテラス オオカミ

opponent

タイタン

大海の歌姫 セイレーン

opponent

マリソコリン

因果応報

「アゲアゲアゲ、セイレーンツカマエタソウ！」
「アレワレツ、族々恨ミ、暗クシテクレル！」
われわれセイレーンの族が彼らに恨まれるのは仕方がない。
われわれの族が共通で持っているスキル「防弾体罰水」それを鍛えるのに我々の族は彼らを利用して磨き上げてきているのだから。
しかしそれは我々だけの特権ではない、彼らもまた自分のスキルを高めるのに我々を利用してきているのだ。

もつこに閉じ込められて何日たつのだろうか。

「水は水をください！」
私の体は半分魚類だ。水が無ければ生きていけない。

「タメタ！水ヲアタエルナドク命令ダ！」

「喉ガ乾イタツナラバコレヲ飲ムワダナ！」
奴らは下卑た笑いを浮かべながら次々と自らの首黒いペニスをすり上げ私の体に白濁液をかけてくる。

汚く臭い精液が私の体を汚し、髪や顔にかかった精液が私を白く染め上げる。ほほを伝い垂れて来た精液が唇に触れる。

こんな汚いものでも水分は水分、私は舌の届く範囲の精液を舐めあげわずかな水分を補給する。

「もつこもつと水が欲しい！」

わずかな水分を得たことでさらなる渴きが加速した私にもう正常な思考力は残されていない。喉の渇きに絶えかね、私は自ら目の前に突き出されるペニスをむしりぶりつく。

「ワハハ、何タコイツ自分カラクワエキタソウ！」
私は尿道に残っているわずかな水分を求めてペニスをすすり上げる。

「ソナンニ歌シケレバクレテヤロウ！」

「やうやう……むい……？」
髪をつかまれ、喉奥までペニスをねじ込まれる。

「ううううう……もつこもつこ……」
頭を押さえ込み、腰を乱暴に振るう。喉奥を乱暴に犯された。

「どひゆるゆる……」
限界に達したゴフリンは私の口内に大量の精を放つ。

「うええ……ういげえ……」

あまりに大量の精液に喉奥を叩かれた衝撃に思わず私は吐き出してしまった。
「もつこい……もう地面に……」
私を知るものが見たらあまりに無様な変わりようになり顔を背けるだろう。

しかし私はもう喉の渇きを癒すことしか考えることが出来なかった。

あれからさらに日が過ぎた。あれからも私には水は与えられなかった。

しかし今ではもう関係ない。

「ういえ……もう喉の渇きに苦しむ……」
「わたしのロマンチックな死して下しやい、精液大じゅきです」と







愛猫神 バンスニテト

水の苗床

「スプレットキヤッツにやー！ 私の爪があわりんたちを切り裂く！ 視界面の首どろろあわりん達の巢に迷い込んでしまったよっだ。切り裂いた鱈魚がくすぐすと同時に同化していく。こんな鱈魚いくら出ても問題ないにやー！ 私は余裕があった私のスプレットキヤッツは鱈魚の群れ相手には相性が良いましたよ。こんな鱈魚相手に負ける気はしなかった。しかしそれが油断となった。後ろに忍び寄る影。私はあわりんたちのキングがそこに潜んでいる。と気ががかなかった。」

「うーうーんー、体が重みを感じて目が覚める。ゆるゆるとした感覚が気持ち悪い。首をめぐらして見ると腰のあたりにぎつみのキングあわりんが押し掛かっている。」

「このままでは取り込まれる。危機を感じあわてて手足をばたつかせるが、あわりん達が壁面から伸びてきて手足も拘束されてしまった。」

「どうやら食べる前に皮を剥くが、よく余分なものを溶かしているらしい。生きたまま溶かされ食べられる。とを考えると身震いするがどろろやら様子がおかしい。」

「どうやら股間から体内に入つてしまつてしまつてしまつた。体を触手のように伸ばし体内に入ろうと蠕動する。」

「幼い秘製はまだびつたりと閉じて本筋の上だったが、半液体の体には関係ない。ダメにやー！ 中に入つてきたらダメにやー！」

「開かれる秘製はあわりんの半透明の体感しのため、体内まで丸見えである。ダメなものにやー！ 見ないで欲しいのにやー！」

「見ているものなど他のあわりんしかいないのだが、いまままで誰の目にも触れさせない。この体内を乗目に晒されその声に涙が混じるが粘体生物にそれを気にする暇はない。」

「あるのはただ子孫を残すという本能のみだ。あわりんはどろんどろんと進みついに子宮の扉を開きその中に進入する。」

「あがりんががががががと進みついに子宮の扉を開きその中に進入する。道が開通されどろんどろんとあわりんの体が体内に入つてくる。」

「おなかにはまるで妊娠のよう膨れ上がった。直感で理解したゴレはあわりんの繁殖力だ。」

「彼らは他の生物の子孫を媒介して分裂増えるのだ。このつとを。新たな命が産道を通じて出ようとしているのを感じる。」

「いやああああああああああ。いやああああああああああ。いやああああああああああ。」

「瞳から新しいあわりんがひらきだされる。その光景を想像するだけで恐怖する。そしてこのままあわりんを増やす苗床として利用される未来を想像して絶望する。としか出来なかつた。」

opponent
キングあわりん





戦乙女

プリンセス ヴァアルキリー

opponent

冥府神ペルセポネ

冥界の門

「く、油断しましたか？」
戦いに負けた私は、敵に捕縛され鎖につながれていた。

「ふふふ、いい格好ね。」

そこには闇のような女がいた。
ペルセポネ。彼女は私とは違う四の冥界の女神にして今回倒しに来た敵だ。

彼女が竹杖をふるうと私の服が鉤が次々と剥けていく。

「このように身をさらす、ひと思いに殺さないか！」

ひと思いに殺してしまつたつまんないやない、わたくし、あなたのような儲

れを知りませんって言うすまじ顔を苦痛でゆがませるのが大好きですの」

「いや、そんなところも触らないで！」

あなた、とてもまぶしいわ、光り輝いてる。さぞかし光の神の加護を受けて

いるのでしょうね。」

私が拒むとなおさら嬉しそうに絡み付いてくる。

右手で胸をもみ左手は私の股間を撫でる。

まだ誰にも触らせたことが采肌が蹂躪されていく。

いろいろと自探の危機感はあるがしかしコレはチャンスだ。今はまだ警戒して

いるがここまで無防備に近づいてきたのであるなら油断を誘えば逆転のチャ

ンスはある。

しかし私が油断を誘うために抵抗をやめると今度は荒々しく乳首と陰核をひ

ねりあげる。

「ダメダメ、私はそんな素直な娘に興味はないの、ちゃんと抵抗してくれなくちゃ」

それからは苦痛の連続だった。ペルセポネは随きるとなく私の体を撫でさ

すり叩めまわした。

そして私が快楽に身を任せようとするところで油断はするなとばかりに

敏感な部分に苦痛を与えてくるのである。

そのため私は気絶することも快楽に溺れる事も出来ず、彼女を睨み付け

耐えるしかなかった。

しかし何度も遊かされ行きも絶え絶えになつてるときにやうと私のチャンス

が訪れた。
今まで私を苛みつづもどか気をはらっていた彼女が明確に隙を作ったのである。
「いまだ「ヴァアルキリーアブレイド」！」
私は自らの持つ光の刃で敵を切り裂く必殺技を発動した。はすだった。
「あら、何かしましたかしら？」
「そんな、なんでも技がでないの!!」
「ふふ、気がつかないか、あなたのかしら、あなたの周りに集まつていた光の力もその光
を作り出す生命の力も感じられなくなつたこと。」
「言われて見れば確かに私の鋭い力は感じられない、それどころか敵
対する闇の力に落ちている。」
「私の力は光や命の力をすべて闇に染め上げる。残念なうたわねえ、あなた油断
で負けたと思つたかもしれないけど、根本的に私には勝てませんわ。」
「しよつと思つていたところ、この言は心を折るには十分だった。」
「そう、その顔が見たかったのですわ。」
絶対に染まつた私の顔を見て、彼女は嬉しそうに笑った。



古代製鉄所

Hagane Tsurugi's illustcollection' s.

サークルたたらば

<http://tataraba.blog36.fc2.com/>

発行 サンダールブE0401

発売日 2013 8/11

500



戦女神

セイメント ミネルヴァ

opponent

ヤマタノオロチ

蛇神

「やあーたあぁあー」

閃

私が剣を振るうと首がまたひとつ飛ぶ。もうこの上程を何度繰り返したであろうか。たしかヤマタノオロチといったかヒメドラに似た多頭蛇の化け物だ。戦いは終始私の有利に進んでいったがこの化け物は凄まじい再生能力を持っていて、いくら傷をつけてもすぐさま回復する。どうもか首を落とすにしてもすぐ新しい首が生えてきてしまう。

「このままではシリ食だ！」

戦い続けてもこちらも少なからず傷を負っているし、何より敵方が限界だ。こうなったら奴が回復する暇もないくらいに連続攻撃で一気にとめるしかない。最後の力を振り絞りクイックボムを発動させようとした時それはもうた。突如奴の体から吹き出るオーラが増す。

「動けない、なんだ、俺の体から強制なフレンジーに体がじびれたように動かない。威圧それが奴の持っているスキルだった。」

「いや、やめて来ないでえい！」

動けなくなった私に奴はちろちろと舌を出しながらその得意味の悪い体で絡みついて来た。

強く締め上げられ顔が軋みをあげる。戦いで傷ついた顔が、の締め付けに耐えられるわけも無く無残に砕け散った。

無防備に晒された裸身が宙に揺れる。顔は砕け散れ白い肌を晒すことになっていたが、それを気にする余裕はもう私には無かった。

「あー……」

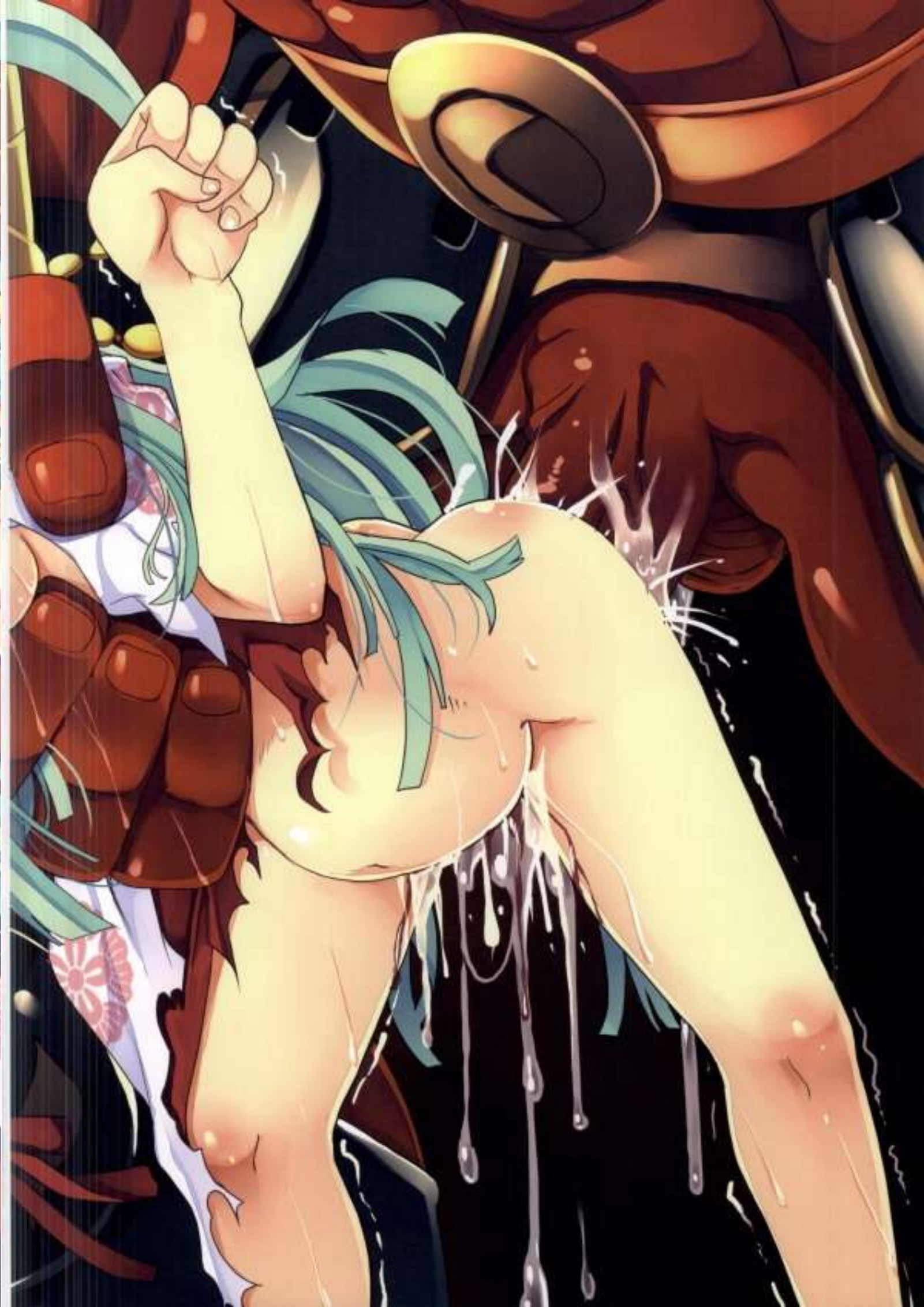
ザリザリザリ。うねった指にその毛羽立った鱗が私の陰核をすりあげ思わず声が出てしまふ。どうやら体が異常に敏感になっているようだ。その声に反応したのかしらないが奴はその複数の舌で乳首陰核はもとより後ろの穴まで刺激してきた。

あれからしばらく経ったのだろうか。体の穴という穴から体液を垂れ流し、弛緩してぼかりと開いた全身の穴はいづれも受け入れ準備が出来ている状態だ。

何の目的でこんなことをしているかわからない。ひよこすると本能で体を休める癖を作っているだけなのかもしれない。けどそんなことはもうどうでも良い。全身を刺激されて快楽のどこか考えられなくなった私はその穴を埋めてくれるものを欲した。

「わたしのおま○ちおちりも自由にぶっつかいくらひやい！」

私はゆっくりと股を開きつづける回らない舌でこの新たな主人を手入れして。ただただ懇願するのだった。



アマテラス オオオカミ

opponent
タイタン

永遠の神の巫女

目の前で赤い暴力が吹き荒れていた。

私はアマテラスオオカミ神の巫女である。
「いくら神の力を持っているとはいえ、圧倒的な暴力には無力なもの。」
巨人族のタイタンにつかまれ私は死を覚悟した。

結果として私は死ななかった。
タイタンの欲望を満足させるためにおもちゃにされたのである。
タイタンは巨人族だけあって体が大きい。今も私を片手で掴んで余りある
その力の物。私の体が小ぶりとがまんなこと関係ない。
私の腕より太い腕が無理やり私の中に侵入しようとする。
ぶちぶち……

何度貫かれても慣れない感覚。また処女膜ととも体が引き裂かれる。
「ひき裂かれたら……」
私もその痛みに叫び声をあげる。
「おなかが自然に離れらるるでかえるのよ……」
おなかは不自然に離れらるるでかえるのよ……

「離れる……もう勘弁して……」
タイタンはお構い無しに私を体ごと前後に揺る。奴にとって私など所詮快楽
を得るためのおもちゃでしかないのだ。
「くおおお……」
その瞬間から白く結晶状の精液がまるで洪水のように私の奥を叩く。
「ああああああああああ……」

物を引き抜かれた股間はほかりと大穴を開け。そこから大量の精液
と血が混じった物がまるで洪水のようにあふれている。
スタボロ口になった私は奴は壊れたおもちゃのように投げ捨てた。
今度こそ終わる……やと開放されると思った時にまた私の能力が起動した
「神の奇跡」
引き裂かれた股間とスガ処女膜も再生する。まるで時間が巻き戻されたか
のように元通りの童女のような綺麗な股間に逆戻りだ。

私は「いやーもう壊して……」
普通なら喜ぶべきの強烈な治療の力がこの場では時間ではない。
奴の剛直がむくむくと起立するそれを見た私の心は終わり無き地獄を
創造し絶望に染まった。
奴はこの新品の股間を引き裂く感覚が大好きなのだ。

あれから何度も引き裂かれても私は能力を失わなかった。
これだけ汚されてもまだその神の寵愛を失わないらしい。
私はアマテラスオオカミ永遠の神の巫女である。
しかし神は私の願いを聞くことはない。



大海の歌姫 セイレーン

opponent
マリソコリン

因果応報

「アタタカアタタカセイレーンツカマエタソイ」
「ラレワレカ族が但し暗ラシテケレル」
われわれセイレーンの族が彼らに根まれるのは仕方がない。
われわれの族が共通で持っているスキル「防体制水」それを喰えるのに我々の族は彼らを利用し増強してきているのだから。
しかしそれは我々だけの特権ではない。彼らもまた自分のスキルを高めるのに我々を利用できるのだ。

「もつこに閉じ込められて何日たつのだろ。」

「水は水をください！」

私の体は半分魚類だ。水が無ければ生きていけない。

「ダメタリホラアタエルトソ命合ダ。」

「喉が乾イタソナラバコレ飲ムワタナ。」

奴らは下卑た笑いを浮かべながら次々と自らの首黒いハズをすり上げ私の体に白濁液をかけてくる。

汚く臭い精液が私の体を汚し、髪や顔にかかった精液が私を白く染め上げる。ほほを伝い垂れて来た精液が唇に触れる。

こんな汚いものでも水分は水分。私は古の届く範囲の精液を詰めあげずかな水分を補給する。

「もっともっと水が欲しい！」

わずかな水分を得たことでさらなる渇きが加速した私にもう正常な思考力は残されていない。

喉の渇きに耐えかね、私は自ら目の前に突き出されるハズにむしやぶりつく。

「ハハ、何タコイツ自分カラクワエテキタソ！」

私は尿道に残っているわずかな水分を求めてハズをすすり上げる。

「ソナニ欲シケレバクレテヤロウ。」

「ぞうくろいむい？」

髪をつかまれ、喉奥までハズをねじ込まれる。

「うろろろくくうろろくく。」

頭を押さえ込み、腰を乱暴に振る。喉奥を乱暴に犯された。

「どひゆるるるるる。」

限界に達したコプリンは私の口内に大量の精を放つ。

「うええーうげえ。」

あまりに大量の精液に喉奥を叩かれた衝撃に思わず私は吐き出してしまった。

「もうたない！地面に這い降りこぼした精を詰め取ろうとする。」

私を知るものが見たらあまりに無様な変わりように顔を背けるだろう。

しかし私はもう喉の渇きを癒すことしか考えることが出来なかった。

あれからさらに日が過ぎた。あれからも私は水は与えられなかった。

しかし今ではもう関係ない。

「ういんばもう喉の渇きを苦しむことはないのだ。」

「わたしのロム◯◯に下じやい精液大じゅきです。」



闇落ちの儀式

「ゼウス様とヘラ様の戦いがあつた。いつもの夫婦喧嘩だ。今回は光の軍勢の目として戦つてみたけど、結果は負け。呑み込まれて正直迷感だけどもまあいつものこと」
通り鼻れると「お一人とも気が済むのか仲直りするからそれではいいと思つていて、
けど今回は様子が変わつたのだ」

「ヘラ様！ 何をなさるのですか！」
「ほほほ、そんなことはわらわらに敵対したからの相應の罰を受けてもらわねばの」
「ヘラ様が私をベッドに押し倒し服をいでいく」
「上になんか乳房に手を置かせながら私の無毛の股間を撫でます」
「地母神とも思えぬかわいらしい体よ」
「恥すかしい乳房の大きさはともかく、母の名のつく神にありながらのまた陰毛の生えてない子供のような股間は私のコンプレックスなのだ」
「さてこんな子供のような股間にゴレが受け入れられるかのう？」
「そういうとヘラ様は子供の通りこかじくらひの寶石を取り出し私の股間にあてがう」

「剛の宝玉！ てやだほそんなんに大きいの人ならぬ！」
「これを受け入れて身も心もわらわの配下に生まれ変わるのじゃ」
「まあ別に股間からである必要はないのじゃがそ」は同じやの」
「そういうとヘラ様は私の羞恥に染まつた顔を見ながら二十キリ笑つた」

「ほらほら、抵抗しても辛いだけじゃぞ」
「そういうと私の乳首や陰核を刺激する種樹なを以て私のアソ」はもうどろどろだ」
「あぁあ、うう、だめなえ、うう、ちやい、ます、もう駄目、あ、あ、あ、」
「こんだけ喚んでいれば大丈夫そうじゃの」
「ぬほほ、股間にあてがわれた宝玉が何の抵抗も無く飲み込まれていく、あてがわれた時はひんやりと冷たかつたが、宝玉が体に取り込まれると同時に熱を帯びてくる」

「そのまゝで体の中から作り変えるような刺激に耐え切れず悲鳴を上げるいやはああああああ」
「ひとおつ、ふたあ、うう、まして何個まで耐えることができようかのう？」
「ああ、いや、無理です無理！ そんなん何個もいれちやだめえ」
「ひよう受け入れたのを皮切りに私の股間はうとうと次々と宝玉を飲み込むやあ、ああ、あつたあ、うう、イク、ひんやり、ううのお、タメダメや、あいく、イクウウウウウウ」

「私はその宝玉からの連続の刺激に耐え切れず体を固わせ果てしてしまつた、目が覚めると世界が変つていた」
「髪の色もすつかりと抜け落ち真っ白になった自分を見たら私は自分であつた」
「良い力に目覚めている、ここを理解した」
「無事生まれ変わったよ、うう、これからはヘラ様のために力を尽くすのだ、イク、ヴァイルセレスの誕生である」

豊穡神

イービル セレス

opponent

ヘラ

愛猫神 バスニテト

opponent

キングあわりん

キングあわりんは、水の中を泳いでいる。彼女の周りには、多くの水の子供たちがいる。彼女が目を覚めると、目のあたりには、水の子供たちが集まっている。彼女が目を覚めると、目のあたりには、水の子供たちが集まっている。彼女が目を覚めると、目のあたりには、水の子供たちが集まっている。

水の苗床
キングあわりんは、水の中を泳いでいる。彼女の周りには、多くの水の子供たちがいる。彼女が目を覚めると、目のあたりには、水の子供たちが集まっている。彼女が目を覚めると、目のあたりには、水の子供たちが集まっている。





古代製鉄所

Hagane Tsurugis illustcollection' s.
サークルたたらば
<http://tataraba.blog25.fc2.com/>
発行 サンダールブ印刷
発行数 2013 8/11

500

R-18
ADULT ONLY!

VANQUISHED PUZZLES & DRAGONS